

書 評

『日本蚕糸業の衰退と文化伝承』(1)

今井 幹夫*

高崎経済大学地域科学研究所長西野寿章氏から『日本蚕糸業の衰退と文化伝承』の書評を書くようにという要請があったので改めて同書を熟読した。その中で再認識したのは本書が一般の研究書と異なっていることである。養蚕・製糸業史の研究では第一人者と知られる東大名誉教授石井寛治氏のご自身の研究の上に立って書かれた第5章の「近代日本の蚕糸業」の中で既に本書についての鋭い講評をなされていることである。さらに「おわりに」の項で西野氏が各章の内容の特徴を要約されている。

この上に立って私が改めて書評を書くのは屋上屋を重ねることになり、且つ石井・西野両氏を超える書評などはとても無理なことなので、本書の刊行に至るまでの同大学の研究実績とその経過に触れながら本書の研究成果の位置づけをしてみることにした。

本書は高崎経済大学地域科学研究所が刊行したものであるが、前身の同大学付属研究所時代から特に郷土群馬の産業・文化・思想等の歴史に焦点をあて多くの研究書を刊行し続け、その成果を世に問うてきた。

例えば私が手持ちの養蚕・製糸業に関わる主な著書の中だけでも『高崎の産業と経済の歴史(昭和54年3月刊)』、『群馬にみる人・自然・思想(平成7年1月刊)』、『近代群馬の蚕糸業—産業と生活からの照射—(同11年2月刊)』、『近代群馬の民衆思想(同14年2月刊)』、『群

馬・産業遺産の諸相(同21年3月刊)』(以上付属研究所編)、また地域科学研究所になってからは『富岡製糸場と群馬の蚕糸業(同28年3月刊)』と今回の『日本蚕糸業の衰退と文化伝承(同30年3月刊)』等である。いずれの著書も養蚕業、製糸業の歴史やそれに携わった人物に焦点を当て郷土の産業の特性を明らかにしている。

これら著書の中で特筆できるのは学内の研究者のみならず学外のその筋の研究者にも門戸を開いて執筆を要請し、層を厚くしながら地域に開かれた研究成果を発表していることである。まさに高崎経済大学が地域貢献として提唱している知の集積・創造・継承・活用・結合を地で行っている感が強い。

それゆえに地域に存在する大学の特色や意義を大きく生かした姿であると高く評価できよう。私も『富岡製糸場と群馬の蚕糸業』では執筆の依頼を受け「富岡製糸場の設立とその意義」を書かせて頂いた。

『富岡製糸場と群馬の蚕糸業』は第15章からなり学内9名、学外5名の研究者が富岡製糸場を中心に群馬県の蚕糸業を多面的に追究した論文集である。特に明治政府が威信をかけて模範製糸場として設立した富岡製糸場が経営主体の変遷を経ながら115年間にわたって生糸生産一筋に稼働し続けたこと。さらに創業当初の建造物群がほぼ旧態のまま残されていること等から史跡・重要文化財、一部が国宝に指定され、さらに『富岡製糸場と絹産業遺産群』として世界文化遺産に登録された業績・功績を多角的に検証したものである。

しかし、ここまでの研究・刊行過程はいわば群馬県の養蚕・製糸業に関わる歴史的な興隆や展開等を検証したものであり、養蚕・製糸業の現況については深く触れているとは言い難い。

* 富岡製糸場総合研究センター所長兼富岡製糸場名誉顧問

かかる先端的な研究過程の中で必然的に位置づけられたのが『日本蚕糸業の衰退と文化伝承』であると考えられる。

本書は書題のごとく日本蚕糸業の衰退の要因をまず究明した二論文、そのうえで世界遺産に登録された富岡製糸場を核として文化財的価値を損なうことなく如何に利活用を図り、後世に伝えることが可能であるかについて、特に参観者のアンケートの中から洞察しようとしている論文、一方各国の世界遺産の現状を足で稼いで取材しながら各国における世界遺産の歩みや現況を述べ、今後の世界遺産関連の望ましい方向性を見出そうとしている二論文と書評である。いわば共に画期的な研究の試みと捉えることができよう。

一般的には高木氏が指摘する如く「衰退過程を探求し記述することはあまり愉快なことではない」から敬遠しやすいのであろう。

しかし明治維新以降、燦然と輝き我が国の近代化に大きく貢献した蚕糸業が昭和時代の終わりころからまさに急速に衰退傾向を示し、国内いたるところに設立されていた製糸場は跡形もなく消滅している現況をただ悲しむだけでなく、衰退の要因を正しく見つめることこそ研究者の務めであるとしたい。また残り少ない産業遺産、特に世界遺産に登録された「富岡製糸場と絹産業遺産群」を完全に保全保護しながら後世に伝えることも現在に生きる者の務めである。

ここで言いたいことは養蚕・製糸業は完全に終焉したわけではない。むしろ「富岡製糸場と絹産業遺産群」が世界遺産に登録された以降、わずかながら養蚕・製糸業は復興の兆しさえあるという。

その中で興味深いのは熊本県山鹿市に数年前から「株式会社あつまる山鹿シルク」が設立され、桑園 25 ha を持ち年間 24 回も養蚕可能な周年無菌養蚕工場が稼働を始めているという。かつてのような養蚕農家ではない企業会社である。これと似た工場が既に昭和初年に鐘紡製糸会社が繭の自給を図るために南九州に 2,000 ha の桑園を興し年間 10 程の養蚕を試みたが、社長の交代によって数年で止めたという事実を石井氏が紹介している。

このようにならないためには「株式会社あつまる山鹿シルク」は持続可能な経営をぜひ図ってもらいたいと念じたい。

おわりになるが石井氏の指摘の如く養蚕製糸業は発展途上国の主な仕事であるという事実を踏まえながら、いずれにしても復興の兆しをどこまで持続可能な事業として継続させていくのかが今後課せられた課題である。このことは今後の方向付けをどのように設定しながら学問的な提言や支援をしていくことが問われる課題ではないのだろうか。

『日本蚕糸業の衰退と文化伝承』を読み込みながら、かかる感想を持った次第である。